宇野浩二全集

第十一巻

宇野浩二全集　第十一卷
定價一五〇〇圓
昭和四十八年二月十日印刷
昭和四十八年二月二十日發行
著者　宇野浩二
發行者　山越豐
印刷者　白井倉之助
發行所　中央公論社
東京都中央區京橋二―一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四
©一九七三　檢印廢止

宇野浩二全集　第十一卷

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

芥川龍之介　七
忘れ得ぬ一つの話　三三六
里見弴　三五四
齋藤茂吉の面目　三七二
文藝よもやま談義　三九五
加能作次郎の一生　葛西善藏の一生　牧野信一の一生
あとがき　四七三

評論評傳　二

芥川龍之介

——思ひ出すままに——

まへがき

芥川龍之介——と、かういふ、ものものしい、題をつけたが、この文章は、芥川龍之介のことを、思ひ出すままに、述べるつもりで、書くのであるから、これまでに私が芥川について書いた文章と重複するところがかなりある、（いや、重複するところばかり）といふやうなものになるにちがひない。

この事を、まづ、はじめに、おことわりしておく。

それから、この文章は、もとより、評傳でも評論でもなく、私が芥川とつきあつた短かい間の、私が、見、聞き、知つた、芥川について、その思ひ出を、主として、書きたい、と思つてゐるのであり、さうして、その思ひ出も、わざとノオトなどをとらないで、おもひだすままに、あれ、これ、と書きつづる、といふやうな方法をとりたい、と思ふので、思ひ出すままに述べる事柄の年月があとさきになつたり、それぞれの話がとりとめのないものになつたり、するにちがひない。

かういふ事も、ついでに、おことわりしておく。

それから、このやうな、はかない、あてどのない、とほい昔の事を、たよりない記憶で、書くのであるから、これから、たどたどと述べてゆくうちに、つぎつぎと出てくる事柄に、思ひちがひやまちがひが多くある事、名を出す人たちに、とんでもない事やまちがつた事を書いたために、すくなからぬ御迷惑をかけるかもしれないことを、（かけるにちがひないことを）前もつて、おことわりし、おわびを申しあげておく。

それから、最後に、これから述べようとする事は、もとより、私のはかない記憶をたどりながら書くのであるから、まづしい頭からくりだす、あやふやな思ひ出が、なくなつてしまつたら、そこで、この文章は、をはらねばならぬ事を、おことわりしておく。

さて、今日（七月二十三日）は、亡友、葛西善藏の祥月命日であり、明日（七月二十四日）は、亡友、芥川龍之介の祥月命日である。葛西は、昭和三年七月二十三日、東京府下世

田ケ谷町三宿の寓居で、この世を去り、芥川は、昭和二年七月二十四日、東京市外瀧野川田端の自宅で、この世を捨てた。——かう書く私は、文字どほり、感慨無量である。

葛西は、芥川の『齒車』をよんで、「芥川ははじめて小說らしい小說をかいた、」といつたが、（といつて、葛西が、芥川の『齒車』以前の小說を、どのくらゐ讀んでゐたかは、わからないけれど、）芥川は、志賀直哉の作品は別として、葛西の小說はかなり認めてゐた。

一

私は、芥川を思ひ出すと、いつも、やさしい人であつた、深切な人であつた、しみじみした人であつた、いとしい人であつた、さびしい人であつた、と、ただ、それだけが、頭に、うかんでくるのである。それで、私には、芥川は、なつかしい氣がするのである、時には、なつかしくてたまらない氣がするのである。

私が芥川と一しよに旅行したのはただ二度である。ところが、その二度とも大阪に行つたことをはつきり覺えてゐながら、大正九年の十一月の下旬に、直木三十五にさそはれて、里見、久米、菊池、その他と、大阪まで行き、それから、芥川と二人で、京都から、名古屋にまはり、諏訪に行つた時の事は、よく、（些細の事まで、）おぼえてゐるのに、もう一つの旅（二度目の旅）の思ひ出は、ただ、芥川と一しよに大阪に行つた、といふ程の記憶しかないのである。

ただ、『二度目』といふ記憶があるのは、（といつて、うろおぼえではあるが、）たしか、大正十三年の二月の中頃であつたか、ある日、芥川が、私の家に、あそびに、（といふより、はなしに、）來たとき、なにかの話がとぎれた時、とつぜん、「……大阪イ一しよに行かないか、ぼく……」と、いつた。そこで、私が、ちよつと考へてから、「ゆきたいけれど、……金がないから、……」といふと、芥川は、すぐ、「金なら、心配は、いらないよ、」といひながら、あの、目尻に、二三本のしわをよせ、目にたつところに大きな齒が一本かけてゐる少し大きな口を細目にひらいて笑ふ、獨得の、おどけたやうな、あかるい、笑ひ方をした。

それだけで、私は、すぐ、「そんなら、行かう、」と、約束をした。

今、その時の事をおもふと、（これも、また、まちがつてゐるかもしれないが、）その時、芥川は、たしか、支那に行くことになつてゐて、それを、紀行文に、書く條件で、たの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まれた、大阪毎日新聞社の、（その頃、學藝部長であつた、）薄田泣菫にあふために、大阪にゆく用事があつたので、私を、その『道づれ』にえらんだのである。それから、金の心配はいらない、といつたのは、泣菫に、支那ゆきのうちあはせに行つたついでに、前借をたのんで、相當の金をうけとるつもりであつたのだ。

薄田泣菫といへば、私が、若年の頃、（十七八歳の時分に、）愛讀した、第一詩集『暮笛集』の卷頭の、『詩のなやみ』の最初の、

遲日巷の塵にゆき
力ある句にくるしみぬ
詩はわたつみの眞珠狩

といふのを、今でも、暗記してゐるほど、私の、青春の、あこがれの、詩人である。

これは、私ばかりではない。ある時、ある會で、辰野隆と久保田万太郎のちかくの席にすわつた時、私が、なにかの話のきれめに、ふと、泣菫の詩のことを、述べると、その話がをはらぬうちに、辰野が、あの有名な『公孫樹下にたちて』のはじめの、

ああ日は彼方、伊太利の
七つの丘の古跡や、
圓き柱に照りはえて、
石床しろき回廊の

と、癖の、口を長方形にひらき、目をランランとかがやかせながら、情熱をこめ、唾をとばしながら、朗誦しはじめた。（私は、その辰野の姿を見ながら、その辰野の朗誦を聞きながら、ひそかに、涙をながさんばかりに、感激した。ああ、論をすれば、しばしば、はげしい敵になる、辰野よ、……と、これを書きながら、私は、また、感激を、あらたにするのである。）

ところが、辰野が、

きざはし狹に居ぐらせる……

と、つづけてゐるのに、いきなり、久保田が、そばから、ひきとるやうに、

青地襤褸の乞食らが、
月を經て來む降誕祭、
市の施物を夢みつつ……

と、肩をゆすりながら、鼻の穴をふくらませながら、夢中になつて、朗誦しはじめた。すると、辰野が、また、……と、書きつづければ、はてしがないのである。

そのうちに、辰野と久保田が合唱しだした。ここらで、私も、夢中になつて、

ここ美作の高原や、

國のさかひの那義山の
谿にこもれる初嵐、
ひと日高みの朝戸出に、
遠く銀杏のかげを見て……

と、やりたいところであるが、遺憾なるかな、私には、胸にあまる感激だけがあつて、聲に出せないのである。

さて、芥川と私は、大阪につくと、すぐ、毎日新聞社に、薄田泣菫をたづねた。

私は大正九年の秋の頃、東京日日新聞と大阪毎日新聞の夕刊に、『高い山から』といふ中篇小說を連載し、大正十一年の春の頃、やはり、東京日日新聞と大阪毎日新聞の夕刊に、『戀愛三昧』（『戀愛合戰』といふ長篇小說の下卷になる）を連載したとき、泣菫から、しばしば、依頼や催促の手紙をもらつたこともあるので、その挨拶をかねても、泣菫に、あひたかつたからである。

ところが、私が泣菫にはじめて逢つて、いきなり、うけた印象は、こちらからお辭儀をしても、ただ、目をパチクリさせて、上半身を前にちよつとかたむけただけで、わづかな時間であつたが、はじめからしまひまで、端然とした形をほとんどくづさなかつたので、實に行儀ただしい人のやうに見えた事である。それで、毎日新聞社を出てから、すぐ、芥川に、その事を、いふと、芥川は、いつも、いたづらをしたり、皮肉をいつたり、する時に、してみせる、笑ひ顏をしながら、「きみ、知らなかつたのか、……あれは、脊椎カリエスで、ギプスを、はめてゐるからだよ、名づけて、『維摩端然居士』といふのだ、」と、くすツ、と聞こえる、笑ひ聲を、たてた。

ところで、この時の芥川との旅行は、たぶん、大阪だけで、一と晩ぐらゐ、とまつて、歸京した、（と思ふ。）

さて、私が芥川と一しよに最初に旅行した時の話は、すでに、二三度書いたが、こんど、これから、書いてみたいのは、前に書かなかつた、（といふより、書けなかつた、）いろいろさまざまの事どもである。

ところで、それを述べるには、讀む人たちが退屈しイヤになる以上に、書く私もイヤでたまらないのであるが、重複するのを承知で、前に二三度も書いたことを、くりかへし、書かねば、話の筋がとほらない。それで、イヤでたまらないのを辛抱しながら、これから、はじめることにしよう。

さて、その時、私たちが、（その時は、直木のほかに、芥川、菊池、田中　純、私、の四人が、）東京驛から、午後六時の汽車で、立つたのを、大正九年の十一月十九日、とすると、二十日の夜は、大阪の堀江の茶屋に、とまり、二十一日の晩は、芥川と私と久米は、生駒山麓の妙な茶屋に、とまり、二十二日の夜は、芥川と私は、京都の鴨川の岸の珍な茶屋に、

とまり、二十三日の晩は、芥川と私は、下諏訪の宿屋に、とまつた、といふ事になる。それから、里見と久米は、二十日の午後十二時頃に東京驛を出る汽車に、のりこんだ。

ところで、二十一日の朝の五時ごろに、私たちは、京都で、おりた。大阪に行く筈であるのを、京都でおりたのは、直木が、だまつて、汽車をおりたからである。これは、田中をのぞいて、芥川も、菊池も、私も、この旅行に出る三日まへに、直木（その時分は植村宋一）を、はじめて、知つたので、それに、その時の旅行は一さい直木まかせであつたから、その時の行動は、かりに、私たちを羊とすれば、直木は、羊たちをみちびく、羊犬（つまり、シイプ・ドッグ）であつた。

それで、ふかい霧のたちこめてゐる、早朝の、京都の町を、七條の驛の前から、三十三間堂のそばを通つて、東山のはうへ、默默として、あるいて行く直木のあとから、芥川も、菊池も、私も、ほとんど無言で、あるいた。

やがて、東山公園の『わらんぢや』に、はひつた。『わらんぢや』は、大根の「ふろふき」（大根をゆでて、そのあつい間に、味噌をつけてたべるもの）を名物とする家であるが、かへつてそれがゲテのうまさがあるのと、たしか、早朝だけ開業してゐるのとで、名代の家である。その『わらんぢや』で食事をするあひだも、『わらんぢや』を出てからも、直木は、やはり、一と言も、口を、きかなかつた。（口をきかない、といへば、これも、前に、書いたことがあるが、東京驛の二等待合室で、芥川と顏をあはした時、兩方がはじめて口をきいたのは、「君は、植村を、知つてるの、」「いや、こなひだ、たのみにきた時、はじめてだ、」といふ言葉であつた。それから、汽車のなかで、寢臺車の中の喫煙室に通じるほそい廊下で、芥川とゆきあつた時、芥川が、「きみ、植村つて、こつちから、話しをしたら、ものをいふよ、」と、いつた。それだけである。）

さて、『わらんぢや』を出てからも、直木は、やはり、だまつて、あるきつづけた。やがて、知恩院のそばも通り、南禪寺の門の前もすぎた。「ものはいはないけど、植村は、實に足の達者な男だね、」と、芥川が、いつた。そのうちに、聖護院の前をとほり、それから、寺町の通りに出て、しばらくあるいたところで鎰屋の二階にあがつた。（鎰屋は、ずつと後に、梶井基次郎が、名作『檸檬』のなかにも、書いてゐるやうに、その頃の京都にしばらくでも滯在した人には、おくゆかしい、なつかしい、喫茶店である。）しかし、鎰屋の二階にあがつて、一服した時は、私たちは、へとへとになり、みな、いくらか、不機嫌になつて、口をきく元氣さへ、なくなつた。

ところが、直木は、ひとり、平氣な顏をして、鎰屋を出ると、また、さつさと、あるきだした。私たちは、足をひきずりながら、直木のあとに、つづいた。直木は、私たちが、一

二歩おくれてあるいてゐても、一間ぐらゐはなれてあるいてゐても、すこしもかまはずに、おなじあるき方で、あるいてゐた。やがて、あの古風な七條の停車場の建て物が、見えだした時、私のすぐそばをあるいてゐた、芥川が、例の鼻聲のやうな低い聲で、

「……今日は、二里ちかく、あるかされたね。……きみ、植村といふ男は、一種の不死身だね、」と、いつた。

すると、その時、突然、私たちより半間ぐらゐおくれて、のろのろと、あるいてくる、菊池が、

「……ぼくは、腹がすいた……」と、もちまへのカン高い聲で、(ちよつと情なささうに聞こえる聲で、)いつた。

「かういふ時に、空腹をうつたへる菊池ひろしは、きみ、一種の猛者だね、」と芥川が私に、云つた。

(芥川は、私の記憶では、『キクチ』と姓だけを、云ふ時のほかは、かならず『キクチ・ヒロシ』と、いつた、これが、本當の讀み方である、と、いはんばかりに。)

京都驛で、大阪に行くために、私たちが汽車にのつたのは、午前十時頃であつた。

京都から大阪までのあひだの二等車のなかは閑散であつた。その時分の二等車は、今の都電や省線の電車のやうに、車の兩側に座席がついてゐて、その座席もふかくクッションもやはらかく、座席と座席のあひだの通路もひろかつた。

さて、汽車の中がすいてゐたので、私たち五人の連中は、すこしづつはなれて、腰をかけた。私たちが腰かけたのは河内の國のはうの側であつたが、その反對の側には、汽車のすすんで行く方の隅に、市村羽左衛門(十五世羽左衛門)と五十あまりの女が、席を、しめ、反對の隅のはうに近い席に、『くろうと』らしい女が二人つつましく、腰を、かけてゐた。

「……汽車にのる前に、ぼくは見たんだが、羽左衛門は、まだ五十前だらうが、顏ぜんたい縮緬皺だね、あれは、白粉のせゐだよ、」と私がいふと、

「色の黑いのも、白粉のせゐだよ、」と芥川がいつた。

その時、ふと、見ると、羽左衛門も、そのつれの女も、座席の上にすわつて、窓の外をながめながら、なにか、しきりに話しあつてゐた。

「……あのつれの女は、細君ぢやないね、」と私が云ふと、

「林家のおかみだよ、」と芥川がいつた。

「きみは、妙なことまで、知つてるね。……ところで、こつちの隅にゐる女は、藝者だらうが、ちよいとキレイだね。」

「君はじつに目がはやいね。」

「さういふ君は、僕より早く見てゐたかもしれないから、どつちが早いか、わからないよ。」

私たちがかういふくだらない話をしてゐた時、(いや、そ

の前から、）座席のほとんどまん中へんに腰をかけてゐた、菊池は、直木が、いつのまにか、どこかで、買つてきた、パンやかき餅を、ムシャムシャと、たべてゐた。が、それから、いつのまにか、座席の上に、横になり、腕枕をして、寢てしまつた。

こちらから見ると、足をのばして寢てゐる、菊池のむかう側に、田中が本をよんだり目をつぶつたりしてゐる、その田中のむかうに、（座席の隅にちかい方で、）直木が、京都から大阪まで、一時間あまりのあひだ、腕ぐみをしたまま、端然と、腰をかけてゐた。

やがて、大阪驛につき、改札口を出たところで、直木が、自動車をよんだので、私たちは、すぐ、自動車にのつた。（まだ自動車のめづらしい頃であつた。）その自動車で、私たちは、堀江の茶屋に、案内された。（堀江は、大阪の島之内にあるが、土地が不便なところで、色町としては二流であるけれど、義太夫の巧みな藝者がゐるので、知られてゐた。その義太夫のできる藝者を太藝者といつた。これは、義太夫の三味線は太棹（棹のふといこと。それで、普通の三味線を、『ほそ』といふ）であることから因んだものである。）

さて、私たちがその堀江の茶屋についたとき、里見と久米が、そこに、來てゐたか、あとから來たか、――その記憶がまつたくない。ただ、その日の夕方に、中之島の公會堂で、もよほされた、文藝講演會に、里見も、久米も、出なかつた事を、はつきり、おぼえてゐる。さうして、その講演會も、菊池が、『文藝と人生』といふ題で、田中が、ツルゲエネフについて、直木が、たしか、『ロシアの前衞作家』といふ題で、主として、ロオブシンについて、講演したことを、おぼえてゐるだけで、芥川がどういふ講演をしたかは、ほとんど覺えてゐないのである。と、書いたが、今、ふと、思ひ出したが、芥川は、會場の裏のはうの講演者の控室のなかで、「……僕は、準備もなにもしてゐないから、『偶感』といふ題にしてください、」といつた。さて、芥川は、演壇にのぼると、四五日まへまでは、名前も知らなかつた、人も知らなかつた、植村宋一といふ人間に、ふらふらと、大阪三界まで、つれてこられ、その上、このやうな演壇に、さらし者にされた、……「もつとも、『晒し者』といつても、晒しの刑に處せられた罪人などではありません、」と、いつて、芥川は、横むきに、あるきだした、『どうです、ちよいと、おもしろいでせう、』と、いはんばかりに。それから、もう一つ前おきの話をしてから、芥川は、「諸君は、漱石先生の『トリストラム・シャンデエ』といふ文章を、讀んだことがありませう、……なかつたら、うちに歸つて、讀んでください、」といふやうな事を、いつてから、「その『トリストラム・シャンデ

エ』といふのは、英國の十八世紀の中頃に、ロオレンス・スタアンといふ『坊さん』の作つた、大長篇小說の題名であるが、この小說は、型やぶりで、奔放で、無軌道で、……作家が人をくつてゐるやうなところは、(「今晩、この公會堂の講演者の控室まで來てゐながら、講演に出ない、宇野浩二先生と、ちよいと似てゐますが、」) この小說(『トリストラム・シャンデエ』)が、第三卷のをはりに至つて、はじめて主人公があらはれる、といふやうな脫線ぶりをしめすところなどは、宇野などの到底およばないところであります、……」と、いつて、芥川は、また、横むきに、瞑想するやうな恰好で、あるきだした。

しかし、これは、しひてほめて云へば、一等俳優の『おもむき』があつた。この時、芥川は、かぞへ年、二十九歲であつたが、すでに、よかれあしかれ、『孤獨地獄』、『芋粥』、『地獄變』、『奉敎人の死』、『秋』、その他を書いてゐたから、鬱然たる大家であつた。

その日の晩、堀江の茶屋で、私たちのためにもよほされた歡迎會は、實に盛大であつた。いりかはりたちかはり、盛裝した藝者が、あらはれた。

その宴會には、東京から行つた私たちのほかに、見しらぬ人が五六人もゐた。その見しらぬ五六人とは、直木に紹介されて、矢野橋村、福岡青嵐、その他の、大阪在住の、日本畫家であることを、知つた。さうして、それらの人たちは、主潮社といふ、美術家の團體の同人であり、その主潮社の社主が、矢野橋村であり、矢野と直木が親友であることなどもわかつてきた。

私たちの中では、里見と久米と田中が飲み手であるから、この三人がみな酒のみの主潮社の六人を相手に、さかんに、飲んでゐた。酒の飲めない直木は、あひかはらず、無言で腕ぐみをして、すわつてゐた。

そのあひだにも、藝者が、めまぐるしいほど、いりかはり、たちかはり、あらはれるが、一人の藝者は、たいてい、五分ばかり、席にゐるだけで、歸つてゆくので、一時間ぐらゐのあひだに、數十人の藝者が、出たりはひつたりする。「われわれは、酒はのまないから、醉はないけど、藝者に、よふね、」と、芥川が、いふ。「そんなことをいひながら、ずゐぶん熱心に見てるぢやないか。」「觀察してるんだよ。なかなかシャンもゐるよ。」「夜目遠目といふこともあるよ。」「いや、あの、矢野のそばにすわつてゐるのは、そばで見ても……」

私と芥川がこんなたわいのない事をいつてゐるあひだに、私たちのそばに來て、「菊池先生、どこにゐやはります、」と、聞く藝者が、何人も何人も、ゐた。これは、菊池のはじめての新聞小說、『眞珠夫人』が、大阪每日新聞に連載ちゆうで

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com